

1 3年 国語科 光村図書 国語3「報道文を比較して読もう」

『交流』分科会
コミュニケーション・他者との協力・つながりの尊重

2 エッセンシャル・クエスチョン

ボランティアは「だれのため」？


3 単元計画

第1時 五輪ボランティアに関する2つの新聞記事を読み、特徴を比較する。

東京五輪のボランティアについて、自分なら参加したいか否かを考える。

第2時（本時） 東京五輪のボランティアの賛否について、それぞれの立場からディスカッションする。

4 SDGsと学習活動

| 時間 | 学習内容 | 主体的活動を促す手立て | 対話的活動を促す手立て | 深い学びを促す手立て | ESDで育てる力と態度、評価 | SDGs |
|----|----------------------------------|-----------------------------------------------------------------|-------------|---------------------------|----------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 3分 | 1. 本時の活動説明 | 今回のディスカッションの主旨（意見交流や質疑応答を通して、気づきを与え合い、それぞれの考えを深め合うこと）を提示し印象付ける。 | | | |  |
| 7分 | 2. ディスカッション準備。前回授業で考えたことを基に、ディスカ | | | 自分の考えを持った状態で、他者との意見交流に臨ませ | | |

| | | | | | | |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|--|-----------------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | <p>ッションで話す内容を個人で整理する。</p> | | | <p>る。</p> | | |
| 20分 | <p>3. ディスカッションを行う。(4人班) それぞれの立場から意見を発表したのち、質疑応答・意見交換を行う。</p> | | <p>発言がしやすいよう、3種類の札(共感・疑問・異論)を手元に準備させ、発言前に提示させる。</p> | <p>意見の異なる他者を交えたディスカッションを行う。</p> | <p>意見の異なる他者を交えたディスカッションにおいても、お互いを尊重しながら対話を行う。また、ディスカッションを通して自らの考えを深める。(ワークシート「振り返り」欄)</p> | |
| 10分 | <p>3. ディスカッションを受けての振り返りを行う。 (最終的な意見はどうか、ディスカッションによって自分の考えを深めることができたかなど)</p> | | | | | |
| 10分 | <p>4. 「ボランティアはだれのため」の答えと理由を Google フォームに投稿する。</p> | | | | <p>ボランティアに対する自分なりの向き合い方を考える。(Google フォーム)</p> | |

5、他との関連

ボランティアの社会的意義、個人的意義に関しての考えを深める機会となるため、道徳や社会科、キャリア教育など幅広い関連性を持った学習活動となる。

6、生徒の評価

- ①ワークシートによる自己評価により、「交流」によって得られた成果を分析する。
- ②google フォームへの回答により、エッセンシャルクエスチョンに対する個々の思考を見てとる。

7、次への課題

ディスカッションのテーマにおいて、「参加したい」と「参加したくない」のどちらかを選ぶかによって、エッセンシャルクエスチョンへの答えが変わってくると推測する。

たとえば、「参加したい」であれば、ボランティアは「自分のため」「社会のため」という、参加者としての視点から見た「誰のため」を考えると予期される。一方、「参加したくない」を選ぶのであれば、五輪においてボランティアの協力を求めることに対して否定的な見方を取ると考えられることから、ボランティアは「困っている人たちのため」という、ボランティアによる直接の受益者という視点から見た「誰のため」を考えることが予期される。

捉え方の切り口そのものが異なっているため、一方を考えたものにとって、他方の考えは新鮮なものとして映るだろう。集計結果は共有し、生徒たちにとっての新たな視点の獲得の機会としたい。

また、本分科会のテーマである『交流』については、すでに様々な授業にて取り入れられている。生徒たちも肯定的に受け止めていることがアンケート等から分かっており、今後も各授業にて積極的に取り入れていきたい。ただし、漠然と取り入れた結果「みんなと話せて何となく楽しかった」授業にならぬよう、『交流』の意義やねらいについて、生徒たちに対してしっかりと意識付けしたうえで実施し、その成果や内的変容を都度追いかけていくことが必要である。